



立教セカンドステージ大学

News Letter mini

Vol. 1

お問い合わせ

June 2020

立教セカンドステージ大学(RSSC)事務室

E-mail: rssc@ml.rikkyo.ac.jp TEL: 03-3985-4672

発行に寄せて

RSSC 副学長 長 有紀枝



今春入学予定であった皆さま、本来であれば春の花が咲きそろう、新緑の美しい立教大学のキャンパスで皆さまをお迎えし、かけがえのない学びの時をスタートさせたはずでした。不測の事態とはいえ、それが叶わなくなった皆さまの落胆は察するにあまりあり、私たち、RSSCに関わる教職員も言葉に尽くせない無念の思いでいっぱいです。

しかしその無念の思いを無念に終わらせず、今後につながる絆を皆さまとの間に育もうと、今回、このニューズレターミニ (NL mini) の発刊に至りました。

RSSCでは、現在、皆さまとの学びを継続すべく、様々な方策を模索しています。その内容については、今後、毎月発行予定のNL mini等にてお知らせしていく予定です。紙幅の限られる本紙ではありますが、皆さまの「学びの情熱」を刺激し、RSSCと皆さまとの橋渡しとなってくれることを心より願っています。

RSSCの一年

チャペルでの入学式と仲間との出会い

4月桜の季節、RSSC 本科・専攻科の入学式が、スタンドグラスの窓から春の暖かい陽射しが差し込む、立教学院諸聖徒礼拝堂(チャペル)にて行われます。

学長からの訓辞、諸先生方からの祝辞が送られ、RSSC 受講生としての1年がここから始まります。



そして、**キャンパスライフが始まり半月ほど過ぎた4月下旬には**、ウェルカムパーティが開催されます。本科生、専攻科生、教職員が一同に会して、その垣根を越えて交流を深める機会になっています。2019年度はRSSC 修了生によるサクソ演奏もありました。



5月キャンパスに通うことに慣れてきた頃、レポートや論文作成に向けて、「授業内情報検索講習会」を図書館の講習会室で実施します。図書館の活用方法から蔵書検索方法までの講義を聞き、その後のブックハンティングでは、課題テーマで図書を検索、実際に各自が書架に探しに行きます。



※2020年度秋学期を開講するかどうかは検討中です。また、今後、各種行事が例年と同様に開催できるかも未定です。感染予防策を講じた安全な形での実施を検討しています。

次回の「RSSCの一年」は、「ゼミナール活動」紹介などを予定しています。

RSSC 事務室から、キャンパス便り

NL miniでは毎月、RSSC 年間行事の紹介や教員からの寄稿、また事務室からはキャンパス便り(不定期)として施設紹介やお知らせを掲載していきます。興味を持って読んでいただけたら嬉しいです。



初回は、春の立教大学キャンパス風景です。

立教大学シンボルマークについてのお話



大学のオフィシャル・シンボルである楯のマークは、1918年に当時のライフスナイダー総理が建学の精神を具体的に表現するものとして定めたと言われています。

楯の中に書かれている PRO DEO ET PATRIA という言葉は「神と国のために」というラテン語で、立教大学では、「普遍的なる真理を探究し、私たちの世界、社会、隣人のために」ととらえ、教育理念として位置づけられています。

楔形文字に記録された疫病

RSSC 教員
立教大学名誉教授 月本昭男



新型コロナウイルスの感染により、世界各国は厳しい対応を迫られています。思えば、人類史は病気のなかでも疫病との格闘の歴史でもありました。中世から近世にかけてヨーロッパで、幾度となく起こったペストの大流行が多くの人の生命を奪ったことはよく知られています。

人類史上、疫病に関する最も古い記録は、古代メソポタミアの人々が楔形文字を刻んだ粘土書板（下図）です。

次に掲げる前 1800 年ごろの一書簡はその一例です。

いま、町に疫病が起こっている。この疫病は神ネルガルによるのではなく、神アサルによる。伝令に呼びかけさせて、そちらの村でも神アサルのために集会を催し、この神を宥め、集会でこの神に鎮まっていただくように。（AbB II 118, 5-22）

ネルガルは災厄をもたらす神、アサルはバビロニアの主神マルドゥクの別名です。今回の疫病はネルガル神によるのではなく、マルドゥク神の怒りによるものだから、そちらの村に疫病が伝染しないように、集会を開催し、神をなだめよ、というのです。疫病は神の怒りによる、と信じられていました。

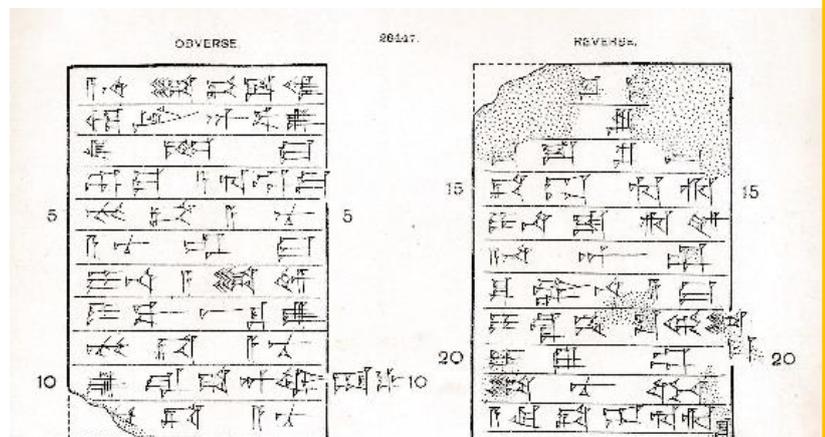
この書簡と同時期に残された神話『アトラム・ハシース』の冒頭の一節には、人々と疫病との格闘が素朴に綴られています。

人類は神々の労役を代わって担うために創造された。ところが、地上に増えすぎたため、その喧騒によって、逆に、神々が悩まされるようになった。そこで至高神エンリルは、疫病を地上に送って人類を滅ぼそうとした。だが、知恵の神の助けをえたアトラム・ハシース（アッカド語「最高の賢者」の意）は、疫病の神ナムタル（シュメル語「運命の切断者」の意）を懐柔して、疫病による人類滅亡の危機を乗り越えさせたという。

神話はさらに人類が飢饉を乗り切る話、箱船を建造して大洪水を生き延びる話へと続き、大洪水物語は旧約聖書にも取り込まれました。

楔形文字資料として、様々な病気に対する処置を記した「医学文書」が残されました。しかし、今日のような疫学的知識はない時代です。疫病は人間の行き過ぎた行動に対する神からの処罰と受けとめられ、疫病をくだす神々を懐柔することが人類の「知恵」とみなされていました。

このたびの新型コロナウイルス感染も、人類は「知識」を駆使して克服するでしょう。しかし、新しいウィルスの出現という事態のなかに、経済第一主義とよいうような、現在の人類社会のありかたに対する、自然からの警告が籠められていないかどうか、耳を澄ましてみる必要もありましょう。そこにこそ、人類の本当の「知恵」のはたらきがあるはずで



< 出典 > 大英博物館刊行 Cuneiform Texts from Babylonian Tablets, etc. XXIX, 1910 Tablet 1

< 教員専門分野 >

古代オリエント学、旧約聖書学